

白道のカミミーノ使り

シロ

野良猫とお年寄りの絆

隣に住む三上のおばあさんが、えさの器をたたいて「シロ、シロ！」と叫ぶと、窠場から白い猫が顔を出す。ゆったりとした足取りを見てベアトリーチェが「かなり年寄りだね」と言う。

最近、山の上に捨てられたようだ。獣やカラスの襲撃をかわしながら里まで下りてきたのか、警戒心が強い。

おばあさんに「飼えば？」と尋ねると、「わしもいつまで生きとるか分からんのに」と言う。

十数年連れ添った猫が去年死んだばかりだ。頼まれて穴を掘り供養したが、その後の寂しげな様子は手に取るように伝わってきた。

「わしが先に死んだら、年寄りのシロを誰が世話してくれる？ 野良猫のままがええ」

三上さんと右隣の大住さん（90歳のラストサムライ）の両方から食べ物をもたらしているシロは、真ん中の我が家の窠場に住んでいる。

ある日、三上さんが呼んでもシロは来なかった。大住さんが言った。「昨夜、裏山でシロが激しくけんかしている声を聞いた。傷だらけで動けないでいるのか、狐なら既に食われて死んだかも知れん」次の日も、三上さんはえさの器をたたいて繰り返し叫んだが、シロは姿を見せなかった。

野良は警戒心を解けば死につながる。危うい緊張の瞬間を生きる猫と、高齢の日々を懸命に生きる人たちが交わす絆。もたれあわず、支えあう。悲しみを溶かしたガラスの破片が胸に刺さる。

野良は野良のまま、飼った猫として去勢された生よりも、野生の死を選んだのか。高齢でも一人で必死に生きる上野の大兄大姉たちの生き方が重なって見える。

シロは数日後に姿を見せた。



シロと三上さん＝筆者写す